

おしの

芥川龍之介

青空文庫

ここは南蛮寺なんぼんじの堂内である。ふだんならばまだ硝子画ガラスえの窓に
 日の光の当っている時分であろう。が、今日は梅雨曇りつゆぐもだけに、
 日の暮の暗さと変りはない。その中にただゴテイツク風の柱がぼ
 んやり木の肌はだを光らせながら、高だかとレクタリウムを守ってい
 る。それからずっと堂の奥に常燈じょうとう明の油火あぶらびが一つ、龕がんの
 中に佇たたずんだ聖者の像を照らしている。参詣人はもう一人もない。
 そう云う薄暗い堂内に紅毛人こうもうじんの神父しんぷが一人、祈祷きとうの頭たまを垂れ
 ている。年は四十五六であろう。額の狭せまい、顴骨かんこつの突き出た、
 頬鬚ほおひげの深い男である。床ゆかの上に引きずった着物は「あびと」と
 称となえる僧衣らしい。そう云えば「こんたつ」と称となえる念珠ねんじゆも手て

頸くびを一巻ひとまき巻いた後のち、かすかに青珠あおたまを垂らしている。

堂内は勿論ひっそりしている。神父はいつまでも身動きをしな
い。

そこへ日本人の女が一人、静かに堂内へはいつて来た。紋もんを染
めた古帷子ふるかたびらに何か黒い帯をしめた、武家ぶけの女房らしい女である。
これはまだ三十代であろう。が、ちよいと見たところは年よりは
ずっとふけて見える。第一妙に顔色が悪い。目のまわりも黒い暈かざ
をとっている。しかし大體だいたいの目鼻だちは美しいと言つても差支
えない。いや、端正に過ぎる結果、むしろ険けんのあるくらいである。
女はさも珍らしそうに聖水盤せいすいばんや祈祷机を見ながら、怯おず怯おず
堂の奥へ歩み寄つた。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪ひざまずいて

いる。女はやや驚いたように、ぴたりとそこへ足を止めた。が、相手の祈祷していることは直ただちにそれと察せられたらしい。女は神父を眺めたまま、黙もくねん然とそこに佇たたずんでいる。

堂内は不相あいかわらず変ひつそりしている。神父も身動きをしなければ、女も眉まゆ一つ動かさない。それがかなり長い間あいだであつた。

その内に神父は祈祷をやめると、やつと床ゆかから身を起した。見れば前には女が一人、何か云いたげに佇たたずんでいる。南蛮寺なんばんじの堂内へはただ見慣れぬはりきぼとけ磔はりきぼ 仏を見物に来るものも稀まれではない。しかしこの女のここへ来たのは物好きだけではなさそうである。神父はわざと微笑しながら、片言かたことに近い日本語を使った。

「何か御用ですか？」

「はい、少々お願ひの筋がございまして。」

女は慇懃いんぎんに会釈えしやくをした。貧しい身なりにも関からず、これだ

けはちやんと結ゆい上げた筈こうがいまげ。髻こまの頭を下げたのである。神父は

微笑ほほえんだ眼に目礼もくれいした。手は青珠あおたまの「こんたつ」に指をから

めたり離したりしている。

「わたくしは一番いちばんヶ瀬半兵衛せはんべえの後家ごけ、しのと申すものでござい

ます。実はわたくしの倅せがれ、新之丞しんのじょうと申すものが大病なのでござ

います。……」

女はちよいと云いよど、今度このちは朗読でもするようすらす

ら用向きを話し出した。新之丞は今年十五歳になる。それが今年ことし

の春頃から、何ともつかずに煩わづらい出した。咳せきが出る、食しょくよく欲よくが

進まない、熱が高まると言う始末しまつである、しのは力の及ぶ限り、
 医者にも見せたり、買い薬もしたり、いろいろ養ようじよう生せいに手を尽
 した。しかし少しも効こうけん験けんは見えない。のみならず次第に衰弱す
 る。その上この頃は不如意ふによいのため、思うように療治りようじをさせるこ
 とも出来ない。聞けば南蛮寺なんばんじの神父の医方いほうは白癩びやくらいさえ直す
 と云うことである。どうか新之丞の命も助けて頂きたい。……

「お見舞下さいますか？ いかがでございましょう？」

女はこう云う言葉の間まも、じつと神父を見守っている。その眼
 には憐あわれみを乞う色もなければ、気づかわしさに堪えぬけはいもな
 い。ただほとんど頑かたくなに近い静かさを示しているばかりである。

「よろしい。見て上げましょう。」

神父はあごひげ顚鬚を引張りながら、考え深そうにうなず頷いて見せた。女はれいこん靈魂の助かりを求めに来たのではない。肉体の助かりを求めに来たのである。しかしそれはとが咎めずともよ好い。肉体は靈魂の家である。家のしゅうふく修ま覆まさえ全ければ、主人の病もまた退き易い。現にカテキスタのフワビアンなどはそのためにじゅうじか十字架をつか拝するようになった。この女をここへつか遣わされたのもあるいはそう云う神意かも知れない。

「お子さんはここへ来られますか。」

「それはちと無理かと存じますが……」

「ではそこへ案内して下さい。」

女の眼に一瞬間の喜びの輝いたのはこの時である。

「さようでございますか？　そうして頂ければ何よりの仕合せでございます。」

神父は優しい感動を感じた。やはりその一瞬間、能^{のうめん}面に近い女の顔に争われぬ母を見たからである。もう前に立っているのは物^{ものがた}堅い武家の女房ではない。いや日本人の女でもない。むかし飼^{かいおけ}槽^{すわい}の中の基^{キリスト}督^{とく}に美しい乳房^{ちぶさ}を含ませた「すぐれて御愛^{ごあいれん}憐^{れん}、すぐれて御柔^{ごにゆうなん}軟^{なん}、すぐれて甘^{うまし}くまします天上^{てんじやう}の妃^{きさき}」と同じ母になつたのである。神父は胸^そを反^そらせながら、快活に女へ話しかけた。

「御安心なさい。病もたいていわかつています。お子さんの命は預りました。とにかく出来るだけのことはして見ましよう。もし

また人力に及ばなければ、……」

女は穏かに言葉はさを挟んだ。

「いえ、あなた様さえ一度お見舞い下されば、あとはもうどうな
りまして、さらさら心残りはございません。その上はただ清きよみ
ずみでら 観世音菩薩かんぜおんぼさつの御冥護ごみょうごにお縋すがり申すばかりでございま
す。」

観世音菩薩！ この言葉はたちまち神父の顔に腹立たしい色を
漲みなぎらせた。神父は何も知らぬ女の顔へ鋭い眼を見据みすえると、首を
振り振りたしなめ出した。

「お気をつけなさい。観音かんのん、釈迦しやか八幡はちまん、天神てんじん、——あなた
がたの崇あがめるのは皆木や石の偶像ぐうぞうです。まことの神、まことの

天主てんしゆはただ一人しか居られません。お子さんを殺すのも助けるのもデウスの御思召おんおぼしめし一つです。偶像の知ることではありません。もしお子さんが大事ならば、偶像に祈るのはおやめなさい。」

しかし女は古帷子ふるかたびらの襟を心もち顛あじに抑おさえたなり、驚いたように神父を見ている。神父の怒いかりに満ちた言葉もわかつたのかどうかはつきりしない。神父はほとんどのしかかるように鬚ひげだらけの顔を突き出しながら、一生懸命にこう戒め続けた。

「まことの神をお信じなさい。まことの神はジュデアの国、ベレシンの里にお生まれになったジェズス・キリストばかりです。そのほかに神はありません。あると思うのは悪魔です。墮落だらくした天使へんげの変化へんげです。ジェズスは我々を救うために、磔木はりきにさえおん身を

おかけになりました。御覧なさい。あのおん姿を？」

神父は厳かに手を伸べると、後ろにある窓の硝子画を指した。

ちようど薄日に照らされた窓は堂内を罩めた仄暗がりの中に、

受難の基督を浮き上らせている。十字架の下に泣き惑ったマリ

ヤや弟子たちも浮き上らせている。女は日本風に合掌しながら、

静かにこの窓をふり仰いだ。

「あれが噂に承った南蛮の如来でございますか？ 倅の命さ

え助かりますれば、わたくしはあの磔仏に一生仕えるのもか

まいません。どうか冥護を賜るように御祈祷をお捧げ下さいま

し。」

女の声は落着いた中に、深い感動を蔵している。神父はいよい

よ勝ち誇ほこったようにうなじを少し反そらせたまま、前よりも雄弁に話し出した。

「ジェズスは我々の罪を浄きよめ、我々の魂を救うために地上へ御降たん誕なすつたのです。お聞きなさい、御一生の御艱難ごかんなんしんく辛苦を
！」

神聖な感動に充ち満ちた神父はそちらを歩きながら、口
早に基キリスト督の生涯を話した。衆しゅうとく徳備り給う処女マリヤに御
受胎たいを告げに来た天使のことを、厩うまやの中の御降誕のことを、御
降誕を告げる星を便りに乳にゅうこう香かうや没藥もつやくを捧ささげに来た、賢い東
方の博士はかせたちのことを、メシアの出現を惧おそれるために、ヘロデ王
の殺した童子どうじたちのことを、ヨハネの洗礼を受けられたことを、

山上の教えを説かれたことを、水を葡萄酒ぶどうしゆに化せられたことを、盲人の眼を開かれたことを、マグダラのマリヤに憑つきまどつた七つの悪鬼あつきを逐おわれたことを、死んだラザルを活かされたことを、水の上を歩かれたことを、驢馬ろばの背にジェルサレムへ入られたことを、悲しい最後の夕餉ゆうげのことを、橄欖かんらんの園のおん祈りのことを、……

神父の声は神の言葉のように、薄暗い堂内に響き渡つた。女は眼を輝かせたまま、黙然もくねんとその声に聞き入っている。

「考えても御覧なさい。ジエズスは二人の盗人ぬすびとと一しよに、磔は木りきにおかかりなすつたのです。その時のおん悲しみ、その時のおん苦しみ、——我々は今想おもいやるさえ、肉が震ふるえずにはいられま

せん。殊に勿もつたい体ない気のするのは礫木の上からお叫びになつた
 ジエズスの最後のおん言葉です。エリ、エリ、ラマサバクタニ、

——これを解けばわが神、わが神、何ぞ我を捨て給うや？……」

神父は思わず口をどぎした。見ればまっ蒼さおになつた女は下したくち

唇びるを噛んだなり、神父の顔を見つめている。しかもその眼ひらめに閃

いているのは神聖な感動でも何でもない。ただ冷やかな軽蔑けいべつと

骨とこにも徹りとおそうな憎悪ぞうおとである。神父は惘あつ気にとられたなり、し

ばらくはただ唾おしのように瞬またたきをするばかりだつた。

「まことの天主、南蛮なんばんの如来にょらいとはそう云うものでございます

か？」

女はいままでをつつましきにも似ず、止とどめを刺さすように云い放

った。

「わたくしの夫、一番ヶ瀬半兵衛は佐佐木家の浪人でござい
ます。しかしまだ一度も敵の前に後ろを見せたことはございませ
ん。去んぬる長光寺の城攻めの折も、夫は博奕に負けましたた
めに、馬はもとより鎧兜さえ奪われて居ったそうでございま
す。それでも合戦と云う日には、南無阿弥陀仏と大文字に書
いた紙の羽織を素肌に纏い、杖つきの竹を差し物に代え、右手に
三尺五寸の太刀を抜き、左手に赤紙の扇を開き、『人の若衆を
盗むよりしては首を取らりよと覚悟した』と、大声に歌をうた
いながら、織田殿の身内に鬼と聞えた柴田の軍勢を斬り靡けまし
た。それを何ぞや天主ともあろうに、たとい磔木にかけられた

にせよ、かごとがましい声を出すとは見下げ果てたやつでござい
 ます。そう云う臆病おくびようものを崇める宗旨しゅうしに何の取柄とりえがござい
 ましょう？ またそう云う臆病ものの流れを汲んだあなたとなれ
 ば、世にない夫の位牌いはいの手前も倅せがれの病は見せられません。新之
 丞しょうも首取りの半兵衛と云われた夫の倅でございませう。臆病もの
 の薬を飲まされるよりは腹を切ると云うでございませう。この
 ようなことを知っていれば、わざわざここまでは来まいものを、
 ——それだけは口惜くちおしゆうございませう。」

女は涙を呑みながら、くるりと神父に背を向けたと思うと、毒ど
くふう風を避ける人のようにさっさと堂外へ去ってしまった。瞳目どうもく
 した神父を残したまま。……………

(大正十二年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「中央公論」

1923（大正12）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おしの

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>